

アメリカ大陸、満喫ドライブ

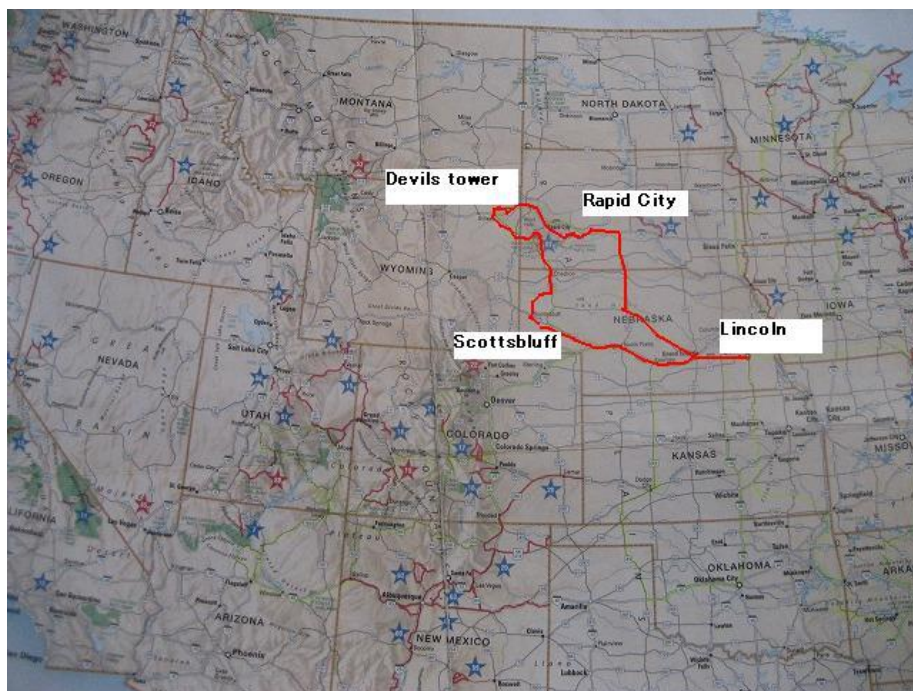
Bad Landと Devils tower の巻

1月に、もう一度、アメリカでの仕事に挑戦したいとネブラスカにやって来ました。仕事は、こちらで日本の自動車メーカーに部品を納入している会社ですが、ここで、新規に工場を建設する話があり、そのフィージビリティスタディーが主な任務です。アメリカのど真ん中にあるここネブラスカは、日本から尋ねるとなると、必ずどこからハブ空港に立ち寄りなければならない、その結果、時間的にはもっともかかる場所になります。気候は内陸気候そのもので、夏冬の寒暖の差が激しく、時に数十度近くの差になります。

もともとがインディアンの居住地であり、アメリカの西部開拓史の拠点でもあった土地ですので、歴史的には非常に新しいのですが、広大な平野と、地球の歴史を辿ることができるほどの自然が残っており、これは、日本ではなかなか経験のできないものです。

そんなアメリカを楽しむ一つの手段として、ドライブをすることにしました。まずは、ネブラスカの北どなりにあるサウス・ダコタ、その西にあるワイオミングのショッキングな大地を紹介したいと思います。

今回、ネブラスカから、月の表面かと思わせるようなバッド・ランド、そして、地球にやってきた宇宙人の宇宙への帰還の発信基地と言われているデビルズ・タワーに行ってきましたので、この旅の記録を報告いたします。



とうとう来てしまいました。

はじめに

ネブラスカに来て、リンカーンを拠点にアメリカの自然と大陸の大きさを肌で感ずるためにあちこちドライブして回ったが、日帰りという限られて時間でゆけるのはある範囲の中でしか行動できなかった。今回、三連休ということで、思い切り山を見に行こうということになった。

行き先は、サウス・ダコタのバッドランドとデビルズタワーだ。バッドランドはこの地球上で最も月の様相に近い感じの地域としてよく知られたところである。一方のデビルズタワーは、富士山のような独立峰で、その形が異様なところからこの地球上の宇宙との交信基地ではないかといわれるほど、形が類まれなものと知られている。

一日目

Grand Island



朝、早めに出発ということにしたが、それでも、なにかと準備に手間取り、リンカーンを出たのが 7:30。これであれば、十分にバッドランドは日の高いうちに通り抜けることができるという手はずであったが、予定は未定、狂って当たり前のドライブとなった。I-80 をグランドアイランドまで飛ばす。久しぶりのドライ

ブで、例により高速は車も少なく気分爽快。そうかい、そうかい。まあ、勝手にしてくれ。このところこの日に備えてドライブをセーブしてきたためか、早々にグランドアイランドで出口を間違える。しっかりとマップで確認しておけば何のことはなかったのだが、ただ、行き当たりばったりの道路標識だけに頼るドライブ、グランドアイランドの名前が出た途端にインターステーツを降りてしまい、結局、また高速に乗りなおすという羽目になった。しかし、こちらの高速は何度降りても、何回乗っても料金をとらないからこんなことはすこしも気にならない。

グランドアイランドから 2 号線に乗る。なぜか、これが 2 号線なのだ。というのは普段 2 号線と言えば、リンカーンから東に向いネブラスカシティーに行くときに乗る道路。そ

れがここで急に復活して、ここからネブラスカの中央部を横きり、延々とサウス・ダコタまで延びているのである。グランドアイランドで、オマハから 30 号線に沿って走っている大陸横断の鉄道はここで二つに分かれ、一本はプラッテ川に沿って西進し、もう一本はこの 2 号線とともに砂山の続く内陸に向ってのびている。その 2 号線に乗った途端、あたりの景色がガラリと変わる。これまで土地が肥えていないながら農場が開拓されていたのだが、このあたりは人を寄せ付けないまったくのヒルという感じ。なるほど、これがサンド・ヒルといわれる土地かと一目見ただけで理解できる。

Broken Bow

人気もすくないサンドヒルが延々と続く高速であるが、それでも規則的に、作られた町という感じの街道筋の町に着く。**Broken Bow** は名前のとおり、折れた弓という街。昔インディアンの壊れた弓がここで見つかったのでつけた名前ということ。ここから先は延々と砂山の世界ということでガイドブックにははや目にガソリンを補給しておくようにとある。ドキッ、なかなか緊張する説明だ。



この日のために、緊急連絡用に携帯電話を購入した。いざというときには仲間と連絡が取れることになっているが、この携帯、高速道路を少し外れると繋がらない代物。世話にならないことを祈る。このブローケンボウはなかなか風情のある町という印象。このあたりではかなり大きな街のようだが、どうしてこんなに人が居るのが不思議なくらい、逆に街を離れると何もない世界だ。みんな、こんな土地でよく生活をしていると思うが、それはそれなりにたくましく生活しているのであろう。途中、**Anselmo** という小さな町にゴシック調の立派な教会があるというので楽しみにドライブを続ける。街に近づくと、これがまた一際目立ったところにある。それこそ人口が数百人程度の街かと思われるくらい田舎の街だが、この教会の立派なこと。こうしたところにこれだけの立派な教会があるということはこのあたりの人の信心の深さを感じさせる。暮らしが貧しく、生活が厳しければ厳しいほど、そうしたところに立派な教会がたつのは、世の東西を問わず同じか。

Thedford という街からいよいよサンドヒルの中を走ることになる。どこまでも、どこまでも平らな平原のなかを道路が只一本、まるで、線を引いたように繋がっている。芽を葺いたばかりの若草の中、風を切って進むのは爽快そのものだ。何の気なしに回りの草原の中に目をやると、やたら、緑の草原のなかに白いこんもりと盛り上がった砂の塊が見える。

丁度、ゴルフ場のフェアウェイがアイアンクラブで芝生を削り取られたような光景である。その数があまりにも多いので、後ろ車の来ていないことを確認し、徐行しながらじっと目を凝らしてみると、その砂山の周りにちょろちょろと動くものが居る。「アッ、これがプレーリードッグか」と直ぐに気がついた。道路からほんの数メートルの直ぐ脇に巣があり、そこで仕切りに周りを警戒するような仕草でキョロキョロしたり、巣から巣に飛び回ったりしている。まさにプレーリードッグが演じる大歓迎のお出迎えというわけだ。

サンドヒルの丘を半ば過ぎると道路は起伏のある丘に差し掛かる。ここでは、一つの丘を過ぎると低い平原には池があり、まさに砂漠のなかのオアシスというような様相である。雉や七面鳥などがこのあたりには良く見られるとのことであつた。まさにその通り。一休みのための車を止めたら、直ぐそこに雉の死骸があつた。ハンターに打たれたのであろうか、それとも車にはねられたのであろうか。とても綺麗な羽をしていたので、思わず持ち帰り剥製にでもしようかと考えたが、「サーズ」のことが頭に浮かび、野生の鳥には病気を持っているものもあるとのことを思い出し、これは断念した。

Valentine

ネブラスカの北のはずれにあるそこそこの大きな街で、近くをネオブラーラという川が流れている。街に近づくとこの川には、アーチ橋としてはアメリカでももっとも古い橋の一つといわれる由緒ある橋が掛かっていた。このあたり、アメリカがフランスからルイジアナを購入する前はフランスの毛皮商人が来ていたらしい。街に入ると、メモリアルディの前日ということで、老人たちが集まりセレモニーをしていた。ミュージアムの前庭に集まり、なつかしのカントリーミュージックを奏でている。



ここのミュージアムもつい一昔の入植者の歴史を記念に残したもので、多分、この老人たちのお爺さんくらいに当るのだろう。みんなでこうして自分たちが若かった頃に苦勞した思い出話に花を咲かせているのだろう。このあたりの人は、生活は決して裕福のように思えないが、こうして自然と調和して自分の人生を気ままに楽しんでいるように見える。精神的な充足感に溢れていた。

Prairie Homestead から バッドランドへ

カクタスフラットで I-90 を降りて、バッドランドに向う。途中、「お見逃しなく」との誘いの看板がある。「プレーリー ホームステッド」とある。どこにでもあるような小さな博物館と土産物屋。すこし時間は遅くなったが、折角とのこともあり、また、まだ日が長いので十分バッドランドは通過できるだろうと、ここで一服する。中に入るとその裏側がここに入植した人たちの昔の建物が見物コースになっていた。入場料が 5 ドルはすこし高い気がしたが、これもなにか意味があるだろうとのことで、丘に散在する昔の開拓者の苦労がそのまま残されているような家を見学。小さな庭をぐるっと回る間に、そここのこんもりと盛り上がった土の中から、こんどは白いリスのようなプレーリードッグが顔を出す。人が近づいても恐れて逃げ出すことがない。リスや小さなプレーリードッグも、あるいは、小鳥さえも、こちらの動物は人間様をあまり恐がらない。だから車に良く跳ねられているし、人が近づいてももう直ぐ手の届くと言うようなところまでも、まるで自分の世界のなかで行動している。この入植者の建物は 1910 年ごろのものだとか。冬はマイナス 30 度、夏には、40 度を越すといわれる厳しい自然環境のなかで、草と土を固めて作ったこの家は、夏涼しく、冬暖かいというものらしい。兎に角、木の育たないこの地で生活するのだから、



いろいろな生活の知恵が取り込まれている

との説明であった。後で、何の気なしに写真を撮った白いプレーリードッグは世界でここだけとのこと。なんでも最初はたまたま発生したものらしいが、それから何世代も注意して交配させて、いまでは、すべて生まれてくる子供は白いとのことだ。そんな研究の賜物であるこの白いプレーリードッグを見ただけでもここに寄る価値は十分にあるとのことだ。

そして、いよいよ念願のバッドランド入場ということになった。遠くからその異様は少しずつ見えていたが、実際、近づいてその姿を目の当たりに見ると、よくもまあ、こんなものができたなーという以外に言葉がない。このあたりは砂岩でできていて、長い年月の間に雨風に侵食されて、こうした景観ができればいい。車で移動するのでなければ、まるで、月のクレーターの中に居る錯覚に陥りそうである。日本で有馬温泉に言ったことがあるが、

そこに行く途中に蓬萊峡という、やはり砂岩でできた山が雨風の浸食で、鋭い頂の山の連なりを見たことがある。あるいは、群馬県にも金峰山という同じような形をした山があったのを思い出した。が、そのスケールが大きいことは比べ物にならない。こんな素晴らしい自然の造詣を自分ひとりで楽しんでいるのが何か申し訳ないような気がしてならなかった。この異様な雰囲気の中を暫くドライブして、I-90 に戻らず、わき道の Sage Creek Rim Road という未舗装の道路に入る。流石にここに入ってくる車は少ない。もうもうと土煙を立ててこの田舎道を突っ走ると気持ちがいい。少々の脱輪はまず大丈夫。周りは先ほどまでの異様な形をしたバッドランドとは違い、なだらかな高原の一本道である。ところが、途中から、この道の直ぐ脇が雨水により侵食されつつあることが分かった。つまり、これは、何万年かまえのバッドランドの姿なのだ。少しずつ削られて鋭い峡谷になっているところもある。削られていないところは芝が生えており、丁度、昔、アメリカの兵隊さんに GI カットというヘアースタイルがはやったが、丁度そんな感じ。頭の上だけが緑



で、あとは、真っ直ぐに切り立った崖となっている。それが丁度顔のように見えるのである。あるいは、あのカットはこの情景をみて思いついたのかもしれないというくらいぴったりの光景である。水の浸食の凄まじさと時間のなせる技。キャニオンがこうしてできる、生きた教材がここにある。途中バイソンが歓迎をしてくれての楽しいわき道ドライブだった。この 590 号線の終

わりが Scenic という街。日も大分暮れてきて、この日の宿を探さなくてはならない。予定では、ワイオミングとサウス・ダコタの州境にある Spearfish というところまでいく予定であったが、時間はとうに 8 時を回っている。そんなわけで、Rapid City でモーターを探したが、これが街道筋とすこし離れていたために良い宿が見つからず、結局 Sturgis という街に泊まることになった。この街は、毎年オートバイ祭りがあり、合衆国中からハーレーダビッドソンが集まる街としてよく知られている。その雰囲気が少しでもあることを予想して、明日の朝、街中をドライブすることを楽しみにベッドについた。

この日の行程

Lincoln	→	Grand Island	→	Broken Bow	→	Dunning	→
Thedford	→	Valentine	→	Olsonville	→	Mission	→
White River	→	Murdo	→	Cactus Flat	→	Bad Land	→
Sage Creek Rim Road	→	Scenic	→	Rapid City	→	Sturgis (泊まり)	

この日のドライブ 590 miles でした。

二日目

流石、デビルズタワー。感激。

昨日は、地球上の月面といわれるバッドランドを心行くまで満喫し、やや興奮して床についた。といっても、すこし頑張りすぎて、走った距離はなんと一日で 590mile。とにかくはしりまくったという感じ。その興奮が冷めやらなかったのか、二日目は、朝六時半に起床。なんといっても今日は、地球と宇宙との交信基地、宇宙人が来るとすれば、ここを目安にするに違いないと言われるデビルズタワーを見にいくわけだから、自称、ケンタウルス座からやってきた私としてはここを見ておかないわけにはゆかない。もし、また宇宙にいくとすればここから発進することになるだろうから。そんな思いに燃えて出発したが、七時半。多分、一時間くらいでデビルズタワーに着くだろうとの目算でちょうどよい時間というわけだ。ところが途中サージスの町でガソリンスタンドにより、満タンにして準備万端となったところで、レジのお姉さんに時間を聞いた。なんと言ふことなしに気にして板のだが、町が少し静か過ぎるのである。案の定、ここは、まだ六時半だという。なるほど、昨日かなり西に走ったため、もう、マウンテン時間帯に入っていたのだ。アメリカ中央時間のリンカーンとは一時間の時差があるというわけ。これは儲けたという気持ちで、I-90 を早めにおりて、すこし山道をドライブすることにした。地図にないわけではないが、デビルズタワーに行くにはすこ



し遠回りになる。が、走ってみてこれがまたすばらしい景色が連続するドライブコース。これまで、平原中心のドライブばかりだったので、この山に囲まれた、とはいっても、山が迫ってくるような道路ではない。両側は遠くまで見晴らしのきく実に開放感がある道なのだ。ハンドルを握っていても実におおらかなカーブでついつい、体全体を使って車から伝わる遠心力を味わっている感じだ。そんなドライブが、これまた延々と続く。

デビルズタワーで

しばらく、緑の木々に包まれた高原ドライブに気分を良くして走っていたら、あるところで突然前方の視界のずっと向こうに、なんとあの異様な形をした岩山が姿を現した。こち

らは、遠くの山さえもほとんど起伏のない光景だから、そこに忽然と空に突き出たまるで大地にナイフをさしたような岩山は特別よく目立つ。これは紛れもなく、あの宇宙への発信基地といわれるデビルズタワーだ。ヤッターッ。ついに実物を見ることができたのだ。しかも、こんな遠方からのすばらしい光景が目の前に広がっているとは。やがて、遠くの山並みの上に見えていたものは、すぐ自分の目前に見えるところまで来た。もう、さえぎるものは何もない。手を伸ばせば触れるくらいのところにデビルズタワーがあるのだ。とにかくもっと近くに行ってみなくてはと、ふもとの高速道路からさらにすぐ直下のビジターセンターに向かう。今度はあまりに近すぎて、時々木々の間に隠れてしまうが、タワーを見上げる角度はますます高くなる。今にも、こちらに覆いかぶさってきそう。まっすぐ垂直に切り立ったがけ、そのがけには縦に岩が並んでいる。どうしてこんな姿になったのか、その謎は説明をよむまで分からない。それこそ、自然はどこまでも気促にこうした造詣を作るのかと驚かざるを得ない。

やがて、タワーの直下にくると、ここから車を降りて、さらに岩山の付け根まで行くことができるようになっていく。なかには、この直立の岩山に挑戦する者もいる。それらしきパーティーがザイルを担いで木陰の中に吸い込まれていく。この岩に取り付かれた登山家だろう。良く見ると既に、あの筋を書いたような垂直の岩の直下まで登っているパーティーがいるではないか。したからみんなで指を指して彼らの動きを見守る。さすがに、ごろ岩のところからその上は難所のように、しきりにコースを見定めているようであった。果たしてあのパーティーにはこれからどんな試練と、それを乗り越えた満足感が待っているのだろうか。そんなことを考え、その出来た謎解きに挑戦しながらこのすばらしい地球の歴史の贈り物を味わった。その出来かたにも信じがたいものがあるが、それよりももっと不思議なことは、このタワーにまつわるインディアンのお話だ。それは、こんなものだ。

昔、このあたりに住んでいたインディアンに八人の子供が居た。そのうちの七人は娘で、一番下の子供は男の子であった。毎日、みんなで自然の中を駆け回り、動物を追いかけたり、小鳥のさえずりにあわせて歌を歌ったりしながら楽しんで遊んでいたが、ある日突然、その男の子は口が利けなくなり、指の先には鋭く尖った爪が伸び、体中に毛が生えだした。そして、ほかの子供達を追いかけまわし、食い殺そうとした。そこで、女の子たちは必死に逃げ回り、木の上に登り、岩にしがみついてこの化け物のようにってしまった弟から逃れた。そして、最後のこの岩山に上り始めたが、熊になったその子はそれでも食べようと追いかけまわしたそう。とうとうこの七人の娘達はこのタワーから降りることができず、天に昇ってしまったそう。それがやがて北の空に輝く七つの星となった。これが北斗七星で、その形が熊の形になっているという。インディアンの昔話には、こうして天に突き出たタワーには、熊がすんでいるという話がよくあるそう。

それにしても、北斗七星が熊の形をしていることというのは、まさにギリシャ人が作った

星座のなかでの北斗七星が大熊座であることと見事に一致している。これは、なんと説明したらよいのだろうか。古代のギリシア人とアメリカのインディアンとの間に文化のつながりが無かったと誰が断言できるのだろうか。ひょっとしたら、その当時からアメリカインディアンとギリシア人とは交流があったか、あるいは、宇宙人がきて、同じような話をその両方に聞かせて上げたのかもしれない。そんな胸がわくわくするような思いをして、その麓から天にまで届くような形でそそり立つデビルズタワーにますます親近感を覚えた次第である。

どうして、こんな岩のタワーができたかって。不思議でしょう。でもそれも長い地球の歴史からすれば、こんなことがほんの一時期の間に出来るのです。つまり、これは昔の火山の火山口に向かってマグマが上ってきた、その跡なのだそうです。大昔は、まだ、そのマグマは大地の中にあったのですが、アメリカでは大地が雨風により削られてなくなってしまふことがよくあります。だから、マグマの周りにあったやわらかい土だけが流されてしまったというわけです。のこされたのは硬い溶岩だけ。しかも、地中から出てきて、火山になって吹き上げるまでには行かなかった溶岩ですから、縦方向に流れに沿った岩の筋ができていうわけ。その高さといい、この形といいこの説明を聞いて納得です。いかがでしょうか。信じられますか。でも、アメリカの大陸ならこんなこともありなのです。

そんな、「アメリカならこんなこともありなの」というのがまだまだ続きます。

ワイオミングのこのあたりが平坦ではあるとは言え、かなりの標高になっているのではないか。すこし、日陰に入ると風がひんやりと頬をなでてくれる。心地よい程度の涼しさだ。このデビルズタワーを見た興奮を残して、次の目的地に向かう。この日のドライブがかなりの強行軍であることが予想されたので、のんびりとしていることもできない。平野だと思っていたが、やはり 14 号線はどんどん坂道を下っていく。やがて平坦な平原に出る。ところがこの平原もまた広い。所々開拓された農地があるが、ほとんどはただの草むら。兎に角、使えるところだけを農場にしている感じ。地図には **Pine Havens** とかかかれている。近くに湖がある。そこに水を飲み集まったのだろうか。道路を鹿の集団が横切っていく。ここが野生の動物にとっては休息地という意味でこんな名前がついたのだろうか。ここから、**Upton** という街まで、**20miles** ほどあるが、これが全くの平野で、そこに多少の起伏はあるにしても単調な真っ直ぐな道が続いている。あまりに広くて、この平地に皺がよってしまった形の起伏だ。

こんなところにも石油が出るんです。アメリカという国では。

ところがびっくり。やがて州境のニューキャスルという街に近づくと、なんとここに例の石油を掘っている首振りポンプが動いているではないか。広いアメリカではこんなとこ

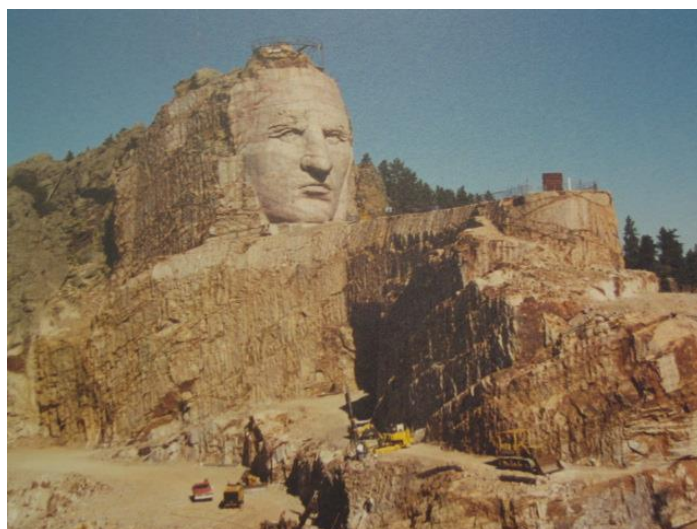
ろにも石油がでるのだ。以前にオクラホマからテキサスあたりをドライブしたことがあるが、その時にも、石油が出るところには新しい街がにぎわいを添えていたが、ここでもその通り。このニューキャスルはこんな田舎にある街にしてはハイカラな街で、家々も明らかに石油成金という感じのモダンなものである。驚き入った次第。一休みのために立ち寄ったビジターセンターでは、例によりここでも親切なおばさんが人懐っこく、これからクレージーホースやラシュモアに行くのだといったら、そのあたりの観光ガイドを手当たり次第、つぎから次へと集めてくれた。



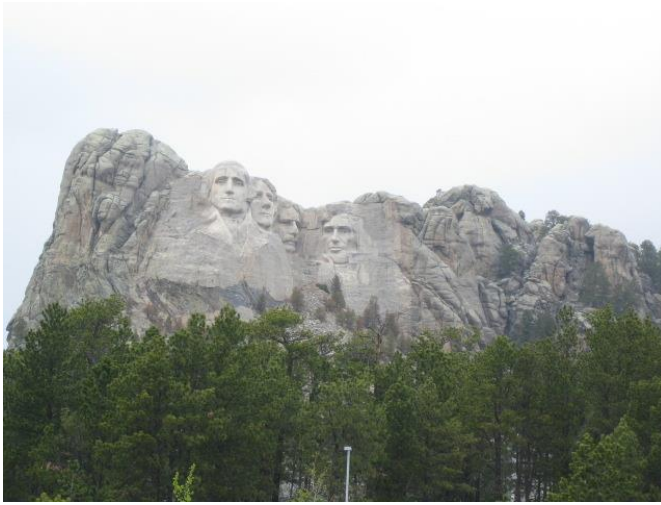
クレージーホース

そして、再びサウス・ダコタに入る。ここでの見所はなんといっても岩山芸術とでも言おうか、アメリカ人の物好きのなせる技というか、とにかく桁外れの芸術品だ。インディアンの英雄「クレージーホース」の彫刻と、アメリカの観光地としてあまりにも有名になりすぎたラシュモアの四人の大統領の顔の彫刻である。

とりわけ、クレージーホースの彫刻はいまだ製作段階というのに、観光地化してしまい、丁度アメリカの学校が長い夏休みに入ったばかりということもあり、たいへん



な賑わいであった。ビジターセンターは、このあたりのインディアンの歴史と、この彫刻のこれまでの経過、既にこれまで半世紀が経っているとのこと、それにこれからどんな形になるかの説明がしてある。このあたりがなかなかうまい演出で、まだ出来上がっていないものを、これからどんな風に仕上げていくかというのを楽しく想像しながら、鑑賞するのも見る人にとっては一つの楽しみでもある。今でも近くに行くと爆破をしているそうだ。その作業を見に行くバスツアーがでており、時間のある人は直ぐ近くまで行って作業を実



際にみてるのだそうだ。それにしてもこの大きな芸術を着想する人間の奇抜さには驚かされる。その奇抜さのオリジナルは、ここからそう遠くは離れていないラシュモアという山の大統領の顔の彫刻だ。そこを目指して山道を進んでいく。が、なかなかそれらしきものが見つからない。途中、山道の両側に大きな岩が現われ始め、その間を縫うようにして進む。急なカーブとさまざまな

な形の岩山、それこそ、想像性の豊かな人にはいろいろな形の姿が連想される岩が次から次へと出てくる。そして、やっとのことで、目的の岩山に着く。ところが、ここはかなりの観光地化が進み、立派な駐車場ができており、小プロムナードを辿って、その彫刻の直ぐ下まで行けるようになっている。刻まれている人物が大統領ということもあり、両脇に国旗が掲げられて、かなり国家的な雰囲気とする岩山である。あいにく、この頃になり雨が強くなったため、この散歩はとりやめた。そして、ここからが車の運転を楽しむことができるという、山の中のアイロンマウンテンロードに挑戦した。その名のとおり、このあたりの山一帯が岩山でできており、このルートは道路がループになっていたり、岩をくりぬいたトンネルがあったりでなかなか変化に富んだ楽しいコースになっている。日本の道路からすれば、この程度のカーブやU・ターンはあたりまえというようなところも、普段、広々とした直線の道路しか運転したことのないアメリカのドライバーにとってはなかなかの難所ようだ。



途中、カーブを曲がりきれなくなって、脇に突っ込んでしまったトラックを見た。プロがこれだから、普通のドライバー歯大変神経を使って運転している。一斜線のこのルート、おかげで前を走るが遅くて予想以上の時間を消費し、いらいらしながらの運転を強いられしたが、ここを下りきるとやがてカスターステートパークに入る。今度は、また、走りなれた広々とした公園で、この一帯が一大リゾートの柱になっているようである。草原では乗馬を楽しむ者や、サイクリングに挑戦している人、あるいは、このあたり石灰岩でできた山ということで、そこら中にケイブ、つまり、洞穴があるので、そこの探検に出かけるツ

アーに参加したりして時間をつぶす。驚いたことに、コースの途中、見晴台で景色を楽しみふと足元を見たら、なんと、あたり一面に水晶が挟まった石がごろごろしている。大きい石から小さな石まで、きらきらとガラスが光っているようだ。なんということか。そういえば、確か、クレージーホースの岩山に来る途中にジュエル・ケープというのがあって、そこでは、宝石になる石がたくさん出るとのことだった。昔はこのあたりにも金を求めて、一攫千金の夢追い人が押し寄せてきたのであろうか。

エジプトの町を思わせるホットスプリングの町

バイソンがノンビリと草を食べ、いたるところにプレーリードッグが巣穴から出て飛び回っている草原を走り抜け、385号線を南に向う。アイアンロードでは山道ということもあり思わぬ時間を食ってしまい、この日に目的地のスコッツブラッフまで辿りつくのは怪しくなってきた。途中、ホットスプリングという街に出る。この街、いやに街が赤い。メインストリートにある建物はどこかエジプトの街のような雰囲気がある。街の名前からすれば、温泉でも出るのかなと思うのだが、町中の建物がほとんど同じように赤い砂を固めたレンガで造られている。すこし町外れまで走ってなるほどと納得。このあたり、土地全体が赤土で覆われているのである。緑



の木々は赤土の間に生えているし、時々見えるがけの岩肌は、まさに赤い岩盤がむき出しになっている。これだけ街全体が赤一色になると綺麗というより異様な感じを受ける。それでも、この自然をうまく利用してここに生活の基盤をつくってしまうのがアメリカ流のやり方のような気がする。街を抜けるとまた、大草原がどこまでも続くなかをまっしぐら



に南に下ることになる。天気が崩れはじめ、雲行きが怪しい。この草原の中、ここらでは名物になっているらしいサンダーストームの予想が仕切りにラジオから流れている。最も、そのラジオはコロラドから送られてくるもので、そろそろネブラスカなのになぜコロラドかなと思ったら、この辺りに一番近い大きな都市はコロラドのデンバーというこ

とらしい。なるほど、これで納得というわけ。大草原のなかで雷にやられては逃げ場もない。これはおちおちしてはいられないとアクセルを吹かす。雨の中細心の注意を払い、といっても、ここの道路は真っ直ぐだから、カーブでスリップする心配はないし、すれ違う車もほとんどない一人旅。まずは、居眠りに注意してというところ。こうして、やがて、ネブラスカに入ったが、まだ、目的のスコッツブラフまでは遠い。途中、やや高原の道路も通らなければならないということもあり、この日は、急遽、クロフォードという街にとまる。ネブラスカを横切る 2 号線と縦に走る 71、385 号線との交叉するところにある町で、田舎町ではあるが、人並みのモーテルがある。取敢えずの宿とした。この日の宿はクロフォード。

Sturgis → Aldow → Hulett → Devil Tower → Moorcroft →
Newcastle → Custer → Crazy Horse → Rushmore →
Iron Mountain Road → Custer State Park → Hot spring →
Chadron → Crawford

この日のドライブ 360 miles

三日目

スコットブラッフ

二日目の夕方から天気がおかしくなり、ネブラスカの北の何もない道を夕方にドライブするのは危険と判断し、この日は田舎町ではあるがたまたま見つけたクロフォードと言う町のモーテルに泊まることにした。ちょうど、2号線と 71 号線が合流し、20 号線と交差しているところでもあるので、一応は交通の要所ということになるが、人口は千人にも満たない町ようだ。食料を手に入れるためにコンビニがあるかと聞いたら、二軒だけあるが、一軒はもう締まっているだろう。もう一軒は直ぐそこだと言う。何のことはない、ついさっきガソリンを入れたスタンドのことである。アメリカでは、このようにガソリンスタンドがちょっとしたコンビニになっている。みやげ物をおいてあるところもあれば、スナック、文房具、お酒など、一応の生活用品は揃っている。ここで、やや早



め、といってもすでに八時を回っていたが、この日の宿とした。二日目のさまざまなアメリカの自然の偉大さを堪能し、興奮冷めやまぬ一晩となった。

時差があるため、朝、七時半はこちらでは六時半。それでも、目的地はリンカーンなのでゆっくりはできない。予定ではスコットブラッフまでいっていることになっている。そんなわけで、どんよりとした曇り空のなか、半分山道の 71 号線を南へ、南へと進んだ。丘の上の、視界の開けた山道で緩やかなカーブと僅かなアップダウンは一人旅のドライブに適度の刺激を与えてくれる。この変化に対応するドライブは、まさにレーシングカーのドライバーの気分。山道はスコットブラッフに近づくにつれて緑あふれる牧草地になり、ちらほら牧場の牛たちが、いかにもよそ者が来たなという感じでこちらを向いている。途中、牧場の主が雨の中を見回りに来たらしい。それまで牧場に散らばっていた牛たちが、一斉に移動を始めた。母親牛も、生まれて間もない子牛も、みんなが足をそろえたように走り出すその光景は、まるで、お菓子をねだりに集まる子供たちの様相を呈しており、思わず噴出してしまった。こんな道を車が通るのは珍しいらしく、その牧場主が親しげに手を振っている。なんとなく、自分もアメリカ人になったつもりで、窓から軽くお返しに手を振った。アメリカ人は本当に気安く、人に挨拶をする。初対面の人でも、軽く「ハロー」と声をかけるのは、開いての人格を伺う意味もあるそうだ。おおらかで、人懐っこい国民性が良く出ている。このあたり、とにかく、見渡す限りどこまでも続く牧場という感じ。ネブラスカの中部のサンドヒルの丘とはまたすこし違った光景だ。

ノースプラットバレーミュージアム

およそ、一時間あまりでスコットブラッフに到着。ブラッフを辞書でひけば「崖」と出て



いる。ここは町の裏にそびえる有名な崖が名所になっている。そんなわけで、必死になってその崖を探したが、あいにくの曇り空、どんよりと雲が立ち込め、それらしきものは見つけることができたが、その全容を確認することができなかった。折角、ここまで来て、素通りでは面白くないと、ビジターセンターで紹介してもらったノースプラットバレーミュージアムに

立ち寄る。例によりほんの申し訳程度の小さな案内板を頼りに、注意に注意を重ねて、ようやく目的のミュージアムを探す。朝の八時過ぎと言うことでほかに客はなし。入ると案内のおば様、とても愛嬌がある。このミュージアムは銀行の提供でできているもので、と説明をしながら、1890 年代にできたというドイツ製のオルゴールをわざわざ回してくれた。

勿論、ぜんまいで動く、円盤状の代物で、とても歴史を感じさせるものだった。古い割りには音は澄んでいて、今でも、こうして素敵な音がでると仕切りに自慢していた。先住民のインディアンの生活の様式と、開拓してここに入植したアメリカ人の苦難の歴史を展示してある。特別展示はモルモン・トレイルの様子を再現したものだ。結婚の衣装と、執務室のような雰囲気の部屋作りがなされており、このあたりが、モルモン・トレイルの特別の拠点になっていたことが良く分る。そんな人たちのポートレートを飾った壁があった。ここに開拓者としての自分たちの形跡を長く後の世に残そうという人たちのもので、飾られる条件は、他の州からここに住みついて、ここで生涯を終えたひと、200ドルを寄付すれば誰でも自分の写真をここに掲げることができる。なかには、苦労を共にした夫婦の仲良く写った写真、若き日の思い出にと撮った写真などなど、それぞれのこの地に対する思いを込めた写真が壁一面に飾られていた。こちらでは、こうした開拓者としての先人の苦労をなんとか後の世代のために残そうという気合がとても強いような気がする。それだけ、自分たちの先祖と自分自身の苦労が並大抵のものではなく、それを乗り越えてきたことにある種の自負を感じているようである。そして、ある程度の生活の基盤が確立されると、あとは他人のためにボランティアをしたり、寄付をしたりして、御互いのよくなっていくことが自分たちのその地での立場を確固たるものにするト考えているようだ。だから、人並み以上の贅沢はしないし、必要以上の蓄えにもそれほど執着していないようだ。

この展示館には、実際に乗ることのできる馬の鞍があり、これに乗って格好よいところを写真に収めようと思ったら、これが子供用のもので、でかいお尻は入らず、中腰の無様な格好の乗馬姿となってしまった。とんだお粗末な一駒(?)である。帰りがけに、日本から来たばかりで、ドライブをしながらアメリカの大自然を楽しんでいる。デビルタワーを見ての帰りだといったら、そんなところまで行き、いろいろなものを見てきたことはとてもすばらしいことだ。自分はとてもそんな経験をしたことはないと言っていた。こちらの人には、自分の州をでて、旅をすることなど贅沢にしか見えないのである。つたない英語ではあるが、「なかなか、上手だ」といってほめてくれた。多分、記念にと買った知恵の輪のお返しに言ってくれたのだろう。

チムニーロックの異様

スコッツブラッフからは、オレゴン・トレイル、モルモン・トレイルといわれる道の逆をたどる。ここは、ネブラスカに来てすぐにドライブをした30号線にオガララで繋がっている。大陸を横断する貨物鉄道の沿線でもあり、ハイウェイと平行して例の長い、長い



貨物列車が旅の供をしてくれる。70 マイルくらいで走っていると抜きつ、抜かれつの良いお供だ。暇のついでにその数を数えたら、110 両以上である。西から石炭を満載して旅を続けているのだ。東部の町で使用する火力発電所の燃料なのであろうか。皮肉なことに、時折すれ違う西行きの貨物列車は石油タンク車を引っ張っている。西で使うガソリンを運んでいるのだろう。その量の大きさ、引っ切り無しにつぎから次へと同じような列車が走っている。アメリカの大量輸送の現実を見せ付けられた感がある。とにかく、この広いアメリカの中なら、どこからだろうが、消費地がどこだろうとどこまでも運んでしまえとのことのようなのだ。そんな貨物列車を眺めながら、時折、**Historic Memorial Site** と書かれた看板を探しながら、ドライブを続けた。天気が良くなかったものだから、見晴らしが悪く景色はなかなか楽しめなかったが、そのかわりこうした標識を見つけてその土地の歴史やいわれを勉強するのも旅の楽しみのひとつ。そして、たまたま見つけたのが、「チムニーロック」の標識である。そこには、この岩山はオレゴン・トレイルやモルモン・トレイルを辿る開拓者の幌馬車隊の大事な自然の標識であったとある。そのつもりがなかったらうっかり見過ごすところだった。なんと、その標識の反対側に、どんより雲の空にうっすらとかすんで突き出た岩山があるのではないか。この岩山が来年発行されるというネブラスカのクォーターコインのデザインになったということを跡で知った。ネブラスカにはいろいろな見ものがあるとはいっても、このデザインになるということはそれだけみんなに知られており、愛着をもたれているということか。偶然とはいえ、その実物を見てきたということは多いに話の種になるところである。

ノースプラッテ

インターステーツを走らずにカントリーロードと言われるハイウェイを走るのは思わぬ発見があること。そのひとつがチムニーロックだった。随分と得をしたような、普段の心掛けの良さが報われたのだと自画自賛をしながらドライブを続ける。こうして 30 号線を西に



進むと、途中からノースプラットの川から少し離れて丘の上をドライブするコースになる。ところが、この丘の上がまたすばらしい平原になっており、ネブラスカにしては起伏が極めて好くないなだらかな土地だ。もちろん、農場として開拓されているが、それもこの広い草原の一部。つまり、機械の入るところだけを農園にして、残りは自然のままの草地となっている。

牛を見当たらないのでここでは牧場はない。そのため、とにかく緑のじゅうたんが見渡す

限り敷き詰められた世界だ。その見事さは、ここの世界、全部がゴルフ場のフェアウェイといった感じ。こんな広い自然を見ていると日本のように狭いゴルフ場でOBを気にしながらゴルフをするのが、まるでばかげているように思えてくる。ゴルフをやりたいければ、ここに来て、右にでも左にでも、また、前でも後ろにでも、好きなところに好きなだけ打ちまくればいいだろうと言いたくなる。一日ワンホール。パー180なん



というコースを作ればいいということか。まるで、緑の海原のなかを好きにドライブしている気持ちでの運転を楽しんで、やがてコースはこの丘を下り、オガラーラの町につく。すぐ近くにレモインレイクというちょっと大きめの湖があり、ここがリゾート地となっている。裕福なアメリカ人は、キャンピングカーに大きなレジャーボートを牽引して、こうしたところでボートや釣り、水上スキーを存分に楽しんで余暇を過ごすわけだ。そうした車が三連休の最終日ということで、インターステーツに列をなして家路についている。色とりどりの派手なレジャーボートや当社の製品を使ったウォータージェットのバイクを、しかも二台も載せて走っているものもある。有り難いお客とは言え、贅沢にも程があると言いたいくらいだ。

ノースブラッテの町から、インターステーツにのり、一揆にリンカーンに帰ることも考えたが、ここは、さらにのんびりと30号線を走ることにした。というのは、この30号線は、オマハからカーニーまで、こちらに来ての最初のドライブで走ったところであり、ここで、カーニーまで走れば、「30号線でネブラスカを横断」のテーマが少しずつ達成に近づくことになる。これにこだわって、ただひたすらカントリーハイウェイを走る。といっても、速度は65マイルの制限速度であるから、ややこれをオーバーして風を切る。遠くインターステーツが並行して走っているが、このスピードであればこれとほとんど遜色はない。

途中、カーニーの町をすこし散策。ここには有名なインターステーツをまたいだアーチモニュメントがあり、話の種にと立ち寄る。中にはみやげ物店とインディアン歴史を紹介したツアーコースがあるが、そろそろ時間も閉館近くだし、また、日本からのお客が来たときには、是非、案内したいところということで、次の楽しみに残しておくことにした。

また、カーニーの町は、ネブラスカ大学の分校があるところで、町中にはすばらしいキャンパスがあり、いかにも学問の町という落ち着きを感じられた。とにかく大学といってもキャンパスの広さが日本の大学とは比べ物にならないので、こんどは是非、こうした大学めぐりをしてみるのも良いかも知れない。

Crawford → Scottsbluff → Chimney Rock → Northport →
Ogallala → North Platte → Gothenburg → Lexington →
Kearney → Lincoln

この日のドライブ 510 miles

今回のドライブ

一日目 590 miles

二日目 370 miles

三日目 510 miles

Total 1470 miles (2352 Km) でした。